

香港、深圳、そして武漢

抗議デモから繋がるもの、その行方



はじめに — 消えつつある灯火

約1年に及ぶ激しい嵐。それは香港における自由の、断末魔の声だった。

2020年5月28日、中国全国人民代表大会において国家安全法が制定された。それは、香港において「反政府的」とされる行動を取り締まるためのものであると言われている。1997年の香港の中国返還以降、50年間約束されていたはずの「一国二制度」、すなわち香港を事実上の独立国として自治を認めるというその制度が、事実上反故にされたことになるのか。

イギリス、オーストラリアをはじめとする各国政府は、国際手続き上にも問題のあるこの中国の行動に対し異議を示した。2019年11月に米国で施行された、「香港基本人権・民主主義法」は、香港の自治が脅かされることになれば、香港が事実上の別国家であるが故に認めていた貿易上の優遇措置を見直すというものであり、当然、米国は中国政府の動きに対して強い反発を示した。米国が優遇措置を撤廃すれば、香港はもちろん、中国も、そして米国も大きな経済上のデメリットを受けることになる。

香港において約一年前に始まった一連の民主化運動は、中国政府の強行手段を引き出してしまった。

その一週間後の2020年6月4日、香港のヴィクトリアパークでは約1万人が集会を開いていた。それは、1989年の天安門事件の31周年の追悼集会だった。香港は中国において、唯一、天安門事件の追悼ができる場所であった。国家安全法の施行前ではあるものの、新型コロナウィルスの蔓延防止のた

めに禁止されていた集会。それでもその日、人々はそこに集い、キャンドルの光で追悼を示していた。

それは、自らの自由への追悼のようにも見える。自由を求める声が中国政府を強行手段に導いてしまった点で、一連の香港と、1989年の天安門事件のイメージは重なる。

私は2019年末の香港を訪れていた。まだ新型コロナウィルスの存在が知れ渡る前、抗議デモの収束が見えず、日本からは危険な場所として扱われていた場所だ。この時期の香港で起きていたこと。それは、大国となった中央集権国家、中国の民主化の兆しだったのか、それとも、結果的に中国政府を強硬手段に導く過ちだったのか。

彼らの行動は間違っていたのか。

別の手段はなかったのだろうか。



2019年12月26日



香港 — 日本人にとって身近なはずの場所

身近なはずの香港。その香港で呼ばれている声に熱心に耳を傾ける日本人が少ないよう見えるのは何故だろう。そんなことを言う自分も、2014年の雨傘運動のころからの動きをしっかりと注目していたわけではない。対岸で起きている火事。同情はするが、その危険に巻き込まれないようにという警戒心の方が先に立つ。平和を望みはするものの、内政不干渉を口実に距離を置く。それが多くの日本人の姿勢であるように思える。

自分が初めて香港を訪れたのは1997年。中国返還の数ヶ月前だった。返還前の香港を自分の目で見る最後の機会、そう思い飛行機に飛び乗った。香港はこれから変わっていく。当時はウォン・カーウアイ監督の映画、『恋する惑星』、『天使の涙』といった、間もなく訪れる「期限切れ」への不安を描いた作品が、当時学生だった私達の共感を得ていた。

期限切れを迎える香港。それは、期限切れを迎える自分たちの学生時代、モラトリアムに対する感傷に共鳴していた。意外だったのは、期限切れを迎えた後に訪れた世界は、期待された程の劇的な変化ではなかったことだ。

返還後の香港。2047年まで返還前の香港の姿を残す「一国二制度」という中国政府の甘言は、香港市民の決断を先送りさせてきた。少なくはない数の人々は香港を離れたが、先送りをした香港の人々の多くは、引き続き先送りすることになった。緩和された「期限切れ」は、柔らかな罠となつて人々を飲み込んでいった。

「香港に自由を」という香港における抗議派のスローガン。民主主義は、人権の尊重を基礎としたイデオロギーだ。人類の歴史は人権を獲得する歴史であったと考えると、その逆行が香港の地で起きつつある。その恐怖が新たな火種となって、中国本土の民主化に発展するとなったら。GDPにおいて世界2位という巨大な存在感を示す中国。そこでの民主化が進むきっかけが今、香港で起ころうとしているのではないか。

その歴史的な事件を肌で感じたい。23年前にも訪れた香港。当時との違いを確認する最良のタイミングでもあるだろう。ただ、私は一介の会社員、エンジニアであり、ジャーナリストではない。危険な地とされる香港を訪問する資格など私には無いのかかもしれない。

2019年11月、NHKの番組「クローズアップ現代」が報じた、香港における抗議者達の活動。地下鉄や信号機等への破壊行為を繰り返す若者たち。そこまでして彼らが訴える理由は、単純なイデオロギーの問題ではないのだろう。リーダー不在と言われる抗議者達においても、キーマンらしき人物は、何者からの暴行を被っていた。それは親中派なのか、それとも権力そのものなのか。権力が暴力によって思想を封じ込めようなことが起きているのであれば、世界的に影響力の高い中国の政府の行動としては尚更に看過できない。



香港における抗議者達の活動。
地下鉄や信号機等への破壊行為を繰り返す若者たち。



日本国内といえば、2020年4月に予定されていた習近平主席の国賓としての受入れもあるからなのか、メディアが反中国の色を出すことは稀な状況だった。当時話題になっていたのは総理大臣主催の「桜を見る会」への招待者選定のあり方だ。正直、香港で起きていることに比べて、あまりにも小さな問題のように思えてしまう。この温度感の違いは何だろう。日本人が鈍感すぎるのか。あるいは、これが日本におけるメディアコントロールの結果なのだろうか。日本においては陰謀論を持ち出すまでもなく、「記者クラブ」内の同調圧力こそがコントロールの実態だ。付度の村社会に本当のジャーナリズムは成り立つのだろうか。自分にとってその違和感はむしろ、香港の旅への後押しとなった。

日本国内の文化として、2019年現在の香港のような危険な場所を訪問することは、倫理上問題があるとされることが多い。危険なところに行って、周囲を心配させたり、結果的に迷惑をかける事になる可能性があるのであれば、あらかじめその可能性から遠ざかる努力をするべきである。人に迷惑をかけることは恥、それが日本の文化だ。書店に行っても、旅行ガイドの棚に香港関連の書籍が取り除かれている始末だ。香港を訪れるという判断自体が、最初の葛藤であった。私は妻をはじめ、一部の身近な人にのみ今回の香港訪問の意図を伝え、密やかに香港に旅立つことにした。妻に話す時は妻に強く反対されるのではないかと不安だったが、想像以上に抵抗なく受け入れてくれた。それは退屈な会社員が思い立った冒険へのささやかなエールだったのかもしれない。

年末の仕事を終え、その足で羽田空港へ向かう。年末の仕事の多忙さに終われば、ゆっくりと香港行きの準備をする時間はなかった。ふとスマートフォンを見ているとフェイスブックの中の知人が香港のニュースをタイムライン上に共有していた。その知人は台湾人だ。台湾人の注目する、香港内のニュース。クリスマスに起きた、抗議派と警察の衝突を報じたものだった。どうやら元は香港市民らしき人物が転送したものらしい。自分のタイムライン上に現れた香港市民。突然、彼らを身近に感じられたような気がした。そして、たとえ返信が得られず無駄になってもよいから、という気持ちで、その香港市民にメッセージを送ることにした。

「私は年明けの一月五日まで香港に滞在します。香港の状況を是非教えて欲しいのです。何か私たち日本人も知るべき事があると思っています。」

その香港市民の投稿を追いかけ、そこにコメントを残している他の人物二名にも同様のメッセージを送った。

返信が得られない覚悟はしていたものの、意外にも早速の応答が得られた。最後に送信した相手からだ。勿論、最初の返事はこうだ。不信と好奇心に満ちた返信。

「あなたは誰？なぜ私にメッセージを送ったの？」

メッセージを送る前に、フェイスブックの投稿を十分に確認する時間はなかったのだが、メッセージのやりとりで相手の人物像が浮かび上がってくる。返答をくれた人物は、香港在住のダンサーの女性、それも、日本の「暗黒舞踏」、海外でもBUTOHとして認知されている舞台芸術の担い手であり、香港で講師も務めているとのことだ。自身は暗黒舞踏については殆ど知識がなかったが、十年以上前に暗黒舞踏の創始者、土方翼のドキュメンタリーを少しだけ見たことを思い出した。白塗りをした裸体で苦しそうに体を動かす姿だ。

「BUTOHって、土方翼とかの舞踏？」

そんなメッセージを彼女に送ってみる。日本人なのだから知ってる当然よね、という反応だ。こちらとしては辛うじて話題を繋いだというのが実際のところなのだけれど。彼女はつい先日、大阪でのパフォーマンスイベントを終えて香港に返ってきたばかりだという。偶然とはいえ日本に好意をもつてくれている人物と接触できたことは大きな幸運だ。飛行機が離陸する直前まで、メッセージをやりとりした。突然のスケジュールなので彼女は直接会って話をする時間を用意することは難しいという。それでも、香港を知る手がかりを得たことになる。旅の始まりとしては幸運が良い。自分の幸運に感謝した。香港行き深夜便は日本を飛び立った。



BUTOH、日本において「暗黒舞踏」として生まれたその舞台芸術は、多くの日本人が知らないところでその可能性を拓げていた。

2019年12月27日

傷跡 — 23年ぶりの香港

夜明け前の香港国際空港。羽田からは飛行機で5時間程度。十分に近いとも言え、十分に遠いとも言える場所。そこで私はドイツ人の友人とビデオチャットをする約束をしていた。彼は今、ハノーバーにいる。私たちは彼が東京に滞在していた際に知り合った。彼は、フリーランス・プログラマであり、エレクトリック・ミュージックのクリエイターでもある。意気投合して、日暮里や新宿の飲み屋で、技術や音楽の話題で盛り上がった。技術が持つ可能性、音楽を含む芸術の持つ可能性だ。お金を得ること以外に、それらはどんな可能性を持つのか。

酔いながらの話題は、私たちの共通の知人の、ある中国人の女性が母国である中国に対して持っている複雑な感情に話が及んだ。彼女のインスタグラムに書かれた言葉。

「中国は中国。与えられるものが気に食わなければ、出でていけばいい。」

それは、不満を持つ他の中国人に対してつき放すような言葉でもあり、同時に自分自身の決意表明でもあるように見えた。

中国は2014年に「社会信用システム」というインターネット監視網や国民個人の信用格付けを柱とする統治の拡充構想を出していった。監視の徹底だ。言論統制された監視大国。中国は息が詰まるような場所なのだろうか。

今、エンジニア達は自然な流れでAI技術を嗜んでいる。それは仕事でAIについている自分にとっても同じだ。そして、私たちエンジニアはAIが通信検閲に使われることの帰結を理解している。AIによって誰もが24時間、監視されている社会が実現されてしまうのだ。特に、プライバシー等の議論が十分に及んでおらず、政府が強権的な力を持つ中国においては、すでにその種の検閲が導入されていると推測されている。エンジニア達が垣間見はじめたディストピア。それが中国すでに実現されている。中国の姿は未来の自分たちの社会でもある。

そして話題は、中国の民主化について技術がどう関わるかという話題に辿り着いた。中国で人々が反政府的な言動を封じ込められているのだとしたら、そして、そこから逃れる術を求めているのであれば、彼が最近興味を持っていた新しい技術、スカットルバット（Scuttlebutt）が役に立つのではないかということだ。スカットルバットはブロックチェーン技術を使って、中央的な役割を持つサーバなしにSNS等の運用を可能にする。利用者間の通信は、中央サーバで保管されることなく、エンド・トゥ・エンドで暗号化されるので、通信経路上での政府等の権力による検閲は不可能だ。



Scuttlebutt

中国政府への拒絶を示し、民主化を求める抗議デモの続く香港。それは監視社会との闘いだ。スカットルバットは香港で必要とされるのだろうか。それが彼と私の共通の関心となった。ドイツに帰国した彼はこの連休に香港に来ることは出来なかったが、可能な限りの支援をしてくれた。

ただ、私の本当の目的は別にあった。香港に行って確かめたいことがあったのだ。

空港の夜が明けつつある。

「君はクレイジーでクールだ。本当に香港に行ってしまうんだからね。」

日本人の知り合いに対してはこの旅は秘密の旅であったので、ドイツ人の彼は絶好の話し

相手だ。妻には危険なところには近づかないと言っていたが、正直その線引きは難しい。全てを妻に話せば心配させてしまうだろう。彼への報告を通することで、私は自分の考えを整理する機会を得られ、次の行動を冷静に考えることができるよう気がしていた。

「最初に泊まるところは、23年前にも泊まった重慶マンションだ。バックパッカーの集まるところだから色んな情報が得られるんじゃないかと期待してる。こんな時期の香港に来るのは、僕と同じくクレイジーな連中ばかりだろうから、きっと面白いことが待っていると思う。」

空港から、重慶マンションのある九龍半島、尖沙咀（チムサーチョイ）行きのバスに乗る。明け方の高速道路を走る2階建てバス。そのバスの車窓から流れる景色。朝焼けの淡いピンクがかかったベイエリアだ。香港の町は丘陵が多く、街として機能する平地は極めて限られている。緑に覆われた丘の隙間に聳え立つ高層ビル達。東京の街に比べると、細長すぎるそのビル達は、見ているだけで不安感を引き起こすようだ。

香港を飲み込んだ中国は2017年、『グレーター・ベイエリア（粵港澳大湾区）構想』を打ち立てた。香港、マカオ、深圳等のエリアをサンフランシスコやニューヨーク、東京匹敵する経済的存在感を持つ拠点に育てるというのだ。中国は香港を使って、さらなる巨大化を目指している。その成長に従い、この景色も姿を変えていくのだろう。

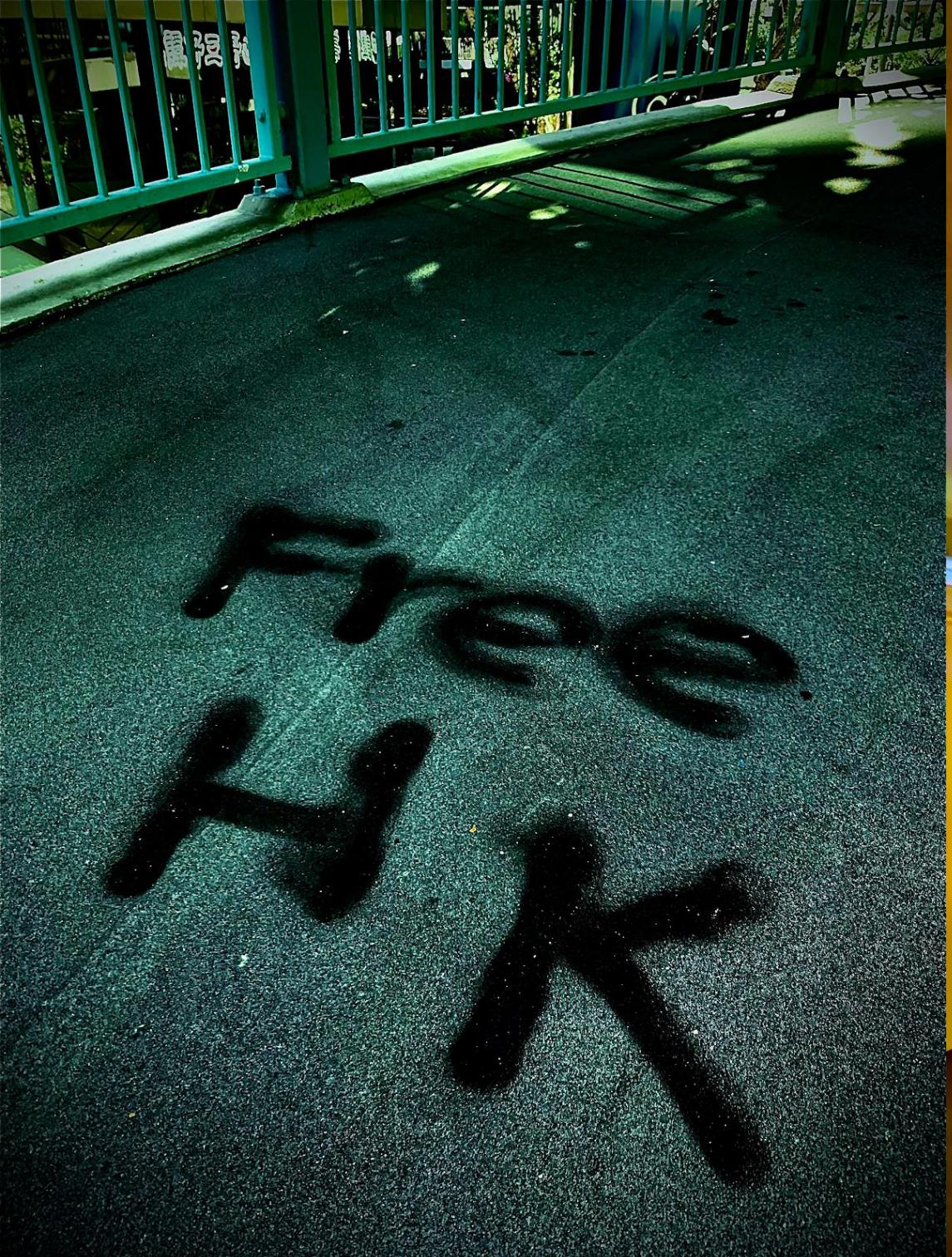




1997年に香港を訪れた時と比較して、一番の驚きは、街中の見かけがほとんど変わっていないように見えることだ。当時もすでに古く、怪しげな雰囲気のあった重慶マンションは、今もそのまま古く怪しいままだった。インド、パキスタン系の住民がたむろする巨大な雑居ビル。それは分かりやすい象徴、混沌の香港のアイコンだ。ネットで宿を予約するも、どうも他の旅人との交流が期待できるドミトリーやうまく見つからない。一方で、ダブルベッドのある個室が1000円代からあることに驚く。まずはここでいいだろうと思い予約した部屋だったが、そこに辿り着いてみると狭くはあるが、想像以上に快適な場所だった。事前にネットで見ていた重慶マンションの他ゲストハウスと比較しても、「当たり」だろう。窓もあり、シャワーやトイレも個室についている。受付カウンターを見ると、なぜか、多数の宿の名前がついている。名前を変えながら営業を続けているということか。

重慶マンションのゲストハウス。
混沌の象徴は想定以上に快適な場所だ。





街に出てみる。ここが本当に抗議デモの舞台となったのだろうかと疑問に思うような平和さ、観光客で溢れかえる、おそらく日常と変わらないであろう風景だった。デモの手がかりを見つけるのは困難だった。歩き回って辛うじて見つけたものはといえば、

「FreeHK」という落書き、そして、おそらくデモ隊が路面のレンガを剥がした後に当局が埋めたと思われるセメントだ。日常は想像以上にドラマを覆いかぶせてしまうということか。



ニュースを調べても、クリスマスを含む3日間でデモが行われたばかりであり、今はむしろ落ち着いている様子だ。程近い香港理工大学に足を運ぶ。大規模なデモの部隊になった場所だ。大学に向かう道路を進むと、工事中のトンネルのような歩道につながっている。ふとそこが、抗議デモの期間中にデモ隊が占拠していた歩道橋であった

ことに気付く。学生達はバリケードを築き、その歩道橋から障害物を落とすことで、香港島と九龍半島を結ぶ眼下の主要道路を封鎖していた。その歩道橋が今は障害物の投下が出来ないように覆いが施されている、空中に浮かぶ、閉塞感のあるトンネルだ。

大学に近づくと、その痛々しい跡が目に入ってくる。校舎に残る黒い煤。校舎に向かう通路は閉鎖されている。校舎側には黒いスーツを来た警備員の姿が見える。香港人ではない外国人が雇われているのだろう。そこにはアジア系の人はいない。これだけ市民と体制側とが分断してしまった時、市民を規制する役割を他の市民が担うのは難しいのだろう。おそらくその様な役割を担える者を雇うことも困難であるし、同じ香港人がそれを担うだけで論争の火種となりかねない。校舎に入る際には厳重に身分証を確認される様子だった。残念ながら中には入れなさそうだ。キャンパスの外から眺める煤けた校舎。それは学生たちの傷跡だ。



2019年12月28日

ピンバッジと雨傘 — 油麻地の記憶



23年前の訪問時に印象に残っていたもの。多数の古いビルの隙間、宵口の街。当時、ここ油麻地（ヤウマティ）の雑然とした夜市の一角で、老婆が地面に広げた布地に雑然とした数々の商品を売っていた。当時の自分がその中に見つけたのは毛沢東のピンバッジだった。その頃の自分は、中国の象徴とも思えるようなその肖像画が意味するものを深く理解していなかった。エキセントリックな全体主義。その程度の認識だ。

ピンバッジを手に取って眺め、買う旨を伝えると、記憶の中のその老婆はにっこりと笑ってこう言った。

「あなたも毛沢東を敬愛しているのね。」

当惑しつつも、曖昧な笑顔で返したことを覚えている。23年前の香港の街、油麻地の露店で、何故その老婆が毛沢東のピンバッジを売っていたのかは分らない。その老婆が毛沢東を敬愛しているのであれば、彼女とては、その後に控えていた香港の返還は喜ばしいものだったということか。返還直前の当時、返還に対して不安を抱える香港人の様子からはなかなか感じることはできなかつたが、香港の中でも時折、反英運動が起きていたようだ。植民地支配への反発、その流れで中国共産党への支持は決して特別なことではなかつたらしい。

香港の話ではないが、当時、友人の部屋で数人で酔いながら話をしていた時、誰となしに発した問いがあった。

「これからどの国が伸びると思う？」

皆、口を揃えて、それは中国だと言う。確かに当時の日本の電機メーカーはこぞって中国進出を謳っていた。中国に工場を持つべきだ。それは人件費の削減だけではなく、将来的な市場がそこにあるのだと。実際、友人の一人はパナソニック社に入社し、間もなく中国勤務となった。情報工学系の学部にいた自分には、就職先として電機メーカーは現実的な選択肢ではあったので、周囲にはその様な道を選んだ友人は多い。当時、日本の電機メーカーは、世界の中で大きな存在感を持っていた。そんな電機メーカーに就職することが安泰だと当たり前のように信じていた、そんな時代だった。

その頃、家電製品にはまだイノベーションの余地が残っていた。テレビと言えばブラウン管であったし、液晶テレビが出たばかりの頃、誰かがつぶやいたこんな独り言を覚えている。— 薄いテレビなんて未来の話だと思っていたのに、こうやって生活の中に入ってくるのか。

とはいへ、当の電機メーカーは早くからその限界に気付いていたのだろう。家電はすぐにイノベーションの限界を迎える。生活の中に重要な位置づけを持つほんどの家電が世の中に出揃えば、それ以降は、イノベーションの競争ではなく、低価格化の競争だ。飽和した市場では、ジリ貧の競争となることが避けられない。家電を買ったことのない人々が潜在的な顧客として存在する市場。家電メーカーが求めていたものはそんな市場、すなわち中国だ。莫大な数の人口がこれから家電を購入する。その市場に入り込まなければ自分たちは生き残れない。

当時の自分には、そんな中国は新しい世界が拓かれる希望の地などではなく、消去法によるビジネスの手段、絶望を先延ばしとするモラトリアムを与えるものとしてしか写らなかつた。

先の質問、これから伸びる国についての自分の答えは米国だった。これから細分化する市場に多様な商品を提供するにあたっては、ベンチャー企業への投資システムが整備された米国こそが力を発する。2020年現在を牛耳る四企業、GAFAのうち、当時存在したのはAppleだけだ。正確には他の企業は誕生していたとしても、まったく知名度が無かった頃だ。米国に夢を感じられた。

かくして、それらの予想はどちらも当たっていた。米国はGAFAを生み、中国はGDPで日本を抜き去ってしまった。想定外であったのは、日本がここまで世界の存在感を失ってしまったことだ。

当時から最前的位置で走っていた米国はともかく、中国に対しては日本がここまで逆転されてしまうということをどれくらいの一般の人々が予想出来ていただろう。今にして思えば馬鹿げているが、私たち日本人には、ある面においては圧倒的な優秀さがあると信じていたのだと思う。いつか米国を抜く日があるかもしれないが、中国に追い抜かれるとは思いもしなかった。

毛沢東のバッジに象徴されるような全体主義、社会主义国と言えば、貧しさの象徴のようにも感じられた。1991年のソ連崩壊。社会主义の失敗は明らかであるように見えた。彼らは何故に進んで貧しくなる道を選んだのか。当時の自分は理解に苦しんだ。

とはいえ、社会は実に雰囲気に左右される。それから23年の間、ソ連崩壊の記憶が薄れ、日本で福祉政策の課題があらためて注目されると、俄かに共産思想の再評価の気運が高まった。2008年のリーマンショック後、社会問題化した派遣契約者の契約解除、「派遣切り」がメディアを賑わせた頃だ。派遣契約の様な不安定な労働形態がいつの間にか日本の中でも常態化していた。それがリーマンショックを引き金として一気に問題が顕在化したことになる。それは、カール・マルクスが『資本論』で示していた、資本主義の当然の帰結であると、識者達は解説した。

資本主義においては、資本家は資金を集め、より効率的な経営を模索する。労働は機械に置き換えられる、そうでなければ労働者はより安い賃金で働くことを強いられる。資本主義社会においては業種ごとにバブルの形成と崩壊を繰り返す。そこには、より流動性の高い労働力が求められる。派遣社員という契約形態は自然に企業にとって必要とされたのだ。

ソ連が健在で、冷戦が緊張感を持っていたころ、資本主義国の共同の脅威は、社会主义の拡大だった。資本主義各国は、労働運動が過激化しない様に、労働者保護の政策を自国の制度に組み入れた。そうやってバランスが保たれていたのだ。それが、ソ連の崩壊によって力のバランスが崩れ始める。社会主义は間違っていた、資本主義による競争こそが人々を豊かにする、そんな風潮が広がることになる。日本において派遣社員という労働形態の導入を認めることになる労働派遣法が導入されたのは1986年。ソ連において、ミハイル・ゴルバチョフが書記長に就任し、事実上の社会主义の失敗を認め、疲弊したソ連の経済の立て直しと大幅な軍縮を西側に提案したペレストロイカ（改革）に乗り出した1985年からの流れに呼応している。ソ連の弱体化、失敗に伴い、日本を含む西側各国は資本主義暴走の歯止めを失ったかの様だ。それ以降、日本においては、数度の段階的な解禁を重ねながら派遣社員という労働形態は拡大を続け、2008年のリーマンショックを迎えることになる。

23年ぶりに訪れる油麻地の街。混沌とした空気は変わっていない。しばらく歩くと、そんな混沌の中で異彩を放つような小ぶりな文化施設に辿り着いた。

「キューブリック」という名の書店とカフェ、映画館の複合施設ではあるが、日本でよく見かけるような「形だけの」文化複合施設とは違う様に思える。キューブリックを店の名にすること自体にも沸々と沸き起こる映画、そして文化への敬愛を感じる。書店内のカフェで提供されるシングルオリジンのコーヒーは高額だ。その割に、客は若者で溢れている。



席について、手に届くところにあった書棚の本を開く。『油麻地』と書かれた写真集。この街が香港を映し出す象徴であるというメッセージがあるかの様にも思える。その写真家、陳偉江氏はこの写真集を日本の出版社を通して出版している。日本から見た、香港のエキゾチズムへの期待に応えてくれている様だ。



写真集『油麻地』に記録されたもの。

沼の底のような混沌。蠢く命。

一見、無秩序に見えるその根幹をなすのは自律分散した無数の系だ。その一つ一つが画一を拒んでいる。

諸外国から見ると、日本の街は極めて清潔に見えるらしい。私たちから見れば、香港を始め、特にアジアの街角に見えるその姿は、剥き出しになった生命感だ。

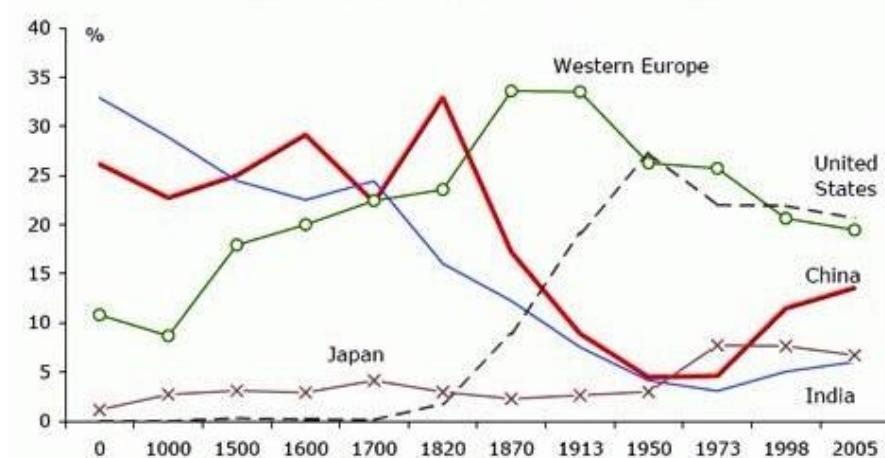
店内を歩く。映画ポスターも多数販売されている。『キューブリック』は、その名前や、インディペンデント系シアターを併設しているというその位置づけからも、香港のコアな映画ファンの集う場所なのだろう。そのポスターの一つに、外部から見た視点で描かれたアジアの姿として代表的だとも言えるものを見つけた。映画『ラスト・エンペラー』だ。

イタリア映画界の巨匠、ベルナルド・ベルトルッチ監督によって1987年に作製されたその作品は、荘厳な清朝中国、紫禁城のシーンがあまりにも有名だ。皇帝の金色と中国の赤。西洋的な視点による期待どおりに組み上げられた構図。

その作品の中で、清朝最期の皇帝、愛新覚羅溥儀の人生を通して描かれるのは、中国の近代史の核心だ。愛新覚羅溥儀が生まれた1906年当時、清帝国は世界におけるGDPシェアで、英国、米国に続く第3位の国家であった。

さらに言えば、清帝国は1820年をその繁栄の頂点を持つ世界最大の国家であった。その存在感はヨーロッパ全土を合わせても及ばない程だったのだ。実際、1776年にアダム・スミスは、「中国はヨーロッパのどこと比べても豊かだし、土壤は肥えていて最も良く耕作され、国民は勤勉で人口も世界で最も稠密だ」、と記している。

当時も三億人以上の人口を誇っていた中国を「無限の市場」であると期待した英國が1849年のアヘン戦争を皮切りに清帝国を追い込んでいく。その後「眠れる獅子」と言われた清帝国が、1894年の日清戦争で敗れ、欧州列強諸国から領有権を剥ぎ取られていった。そんな過程、屈辱の中で生まれたのが英國領香港だった。愛新覚羅溥儀の没落は、中国の没落だ。愛新覚羅溥儀が亡くなったのは1967年。中国の没落はその一世代の間で起きたのだといっても過言ではない。



ユーラシアグループの推定による、
世界におけるGDPシェアの2000年間の推移。
中国はかつて世界の覇者であったことを示している。



キューブリックで手に取ったもう一つのものが『傘民』、2014年の雨傘運動を記録した写真集だ。失われた尊嚴を取り戻しつつある中国。その中国への併合に強い反発を示す香港市民。皮肉な構図だ。中国が示すのは、復権において必要なのは強力な中央集権であり、香港市民が求めるのは、民衆を蔑ろにしない民主主義の保障だ。

リーダは当時17歳のジョシュア・ウォン。ただ、彼は当時から頑なに自分を含めて特定の人物がリーダとして前面に立つべきでないと主張していた。リーダに依存した革命は脆い。雨傘運動は、結果的に内部分裂により力を失い、写真の中の出来事、過去の記憶となってしまったのだ。



2014年の雨傘運動における、ジョシュア・ウォン（黄之鋒）
その17歳のリーダにメディアは注目した。



2019年12月29日

抗議者たち — 雨の中の集会

香港抗議デモのスレッドの情報

舞踏家の彼女からも次々に情報が送られてくる。どうやら1月1日に大規模なデモが予定されているらしい。それに先駆けて、抗議者たちの集会もいくつか予定されているようだ。

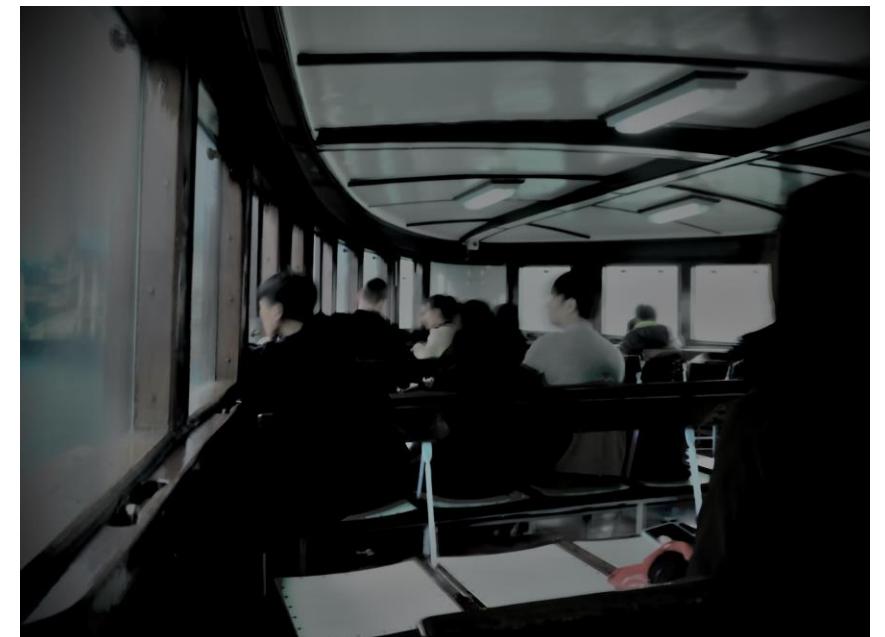
彼女達に感謝をしつつも、足で稼いだ情報の少なさに自分の不甲斐なさを感じる。やはり、情報を得られる場所に移る必要があると考え、あらためてドミトリーを探すこととした。そんな中でインターネット上で

見つけた場所は、「香港と共に立ち上がり！」と書かれ、デモ隊の旗を宿の紹介欄に大きく掲げたドミトリーだった。ジャーナリスト歓迎とある。ここだ。ここに行けばもっと情報が得られるはずだ。場所は同じ、尖沙咀。早速、宿を変える。

その宿には小さなリビングがあり、気軽に他の旅行客と話ができそうな雰囲気だった。何人かと他愛のない話をする。デモの話題には至らない。皆、ただ単に香港を通過地点として立ち寄った旅行者の様だ。政治的な話はしづらい空気を感じる。

redditの情報を頼りにすると、香港島のセントラルで抗議者の集会があるようだ。雨の中、敢えてスターフェリーを使って香港島に向かう。水平線上に浮かぶ雨霞のビル群は、期待どおりに幻想的だ。スターフェリーを降りると警官が5人。彼らの恰好は、日本人が通常思い描く警官ではなく、軍隊のそれに近い。

九龙半島から香港島をつなぐスターフェリー。10分程度というその短い航路以上の分断がそこにはある。





セントラルは、尖沙咀と比べて別の世界の様だ。現代的で、無機質。東京にいるような錯覚も覚える。集会地点とされる場所、エジンバラ広場に近づくと、次第に抗議者達の姿が見え始める。想像以上に数が多い。若者だけに限らない。それは、黒衣の集団、ブラック・ブロックをなしている。

黒衣は香港の抗議活動に限ったものではない。1980年代、ヨーロッパの反独裁主義運動オートノミズムで始められ、各種抗議活動で採用されてきた活動手法だ。それは、参加者の一体感を強めるとともに、集団形成のヴィジュアル面のインパクトを増大させる。そして、集団内の個人特定を困難にする。

雨の中、黒衣の老若男女がマスクをつけて集まっている。皆、当局により撮影された写真から顔を特定されて、何らかの処罰を受けることを危惧しているのだ。

ステージの上から広東語で何かを叫んでいるが、自分には理解はできない。広東語も香港の人々にとってはアイデンティティの一つなのだろう。長いイギリス領時代を経ても、意外なほどに、香港では英語が通じない。さらに今後は、中国に組み入れられるにつれ中国本土で話される普通話（マンダリン）が必要になっていくだろう。広東語は同じ中国語とはいっても普通話とは、ほぼ別の言語だと考えた方が良い。未来のない言語。失われていくアイデンティティ。そこにどこまで愛着があるのかは、部外者である自分には分らない。

この半年間の抗議デモの推移が、地面に敷かれた黒い布に記載され、参加者達がそこに様々な思いを書き加えている。

約1年前、2019年11月末の区議会議員選挙では、民主派、すなわち抗議派が大勝を収めた。私は日本からその経緯を見ていた。香港市民にとってこの選挙は大きな意味を持つ。区議会議員という言葉だけでは、重要ではないという印象を受けるかもしれない。中国から多くの普通選挙を剥奪された香港では、区議会議員選挙は市民の意向を明らかにさせる貴重な機会なのだ。どれぐらいの有権者が実際に抗議派を支持するのか。抗議派は市民の権利を主張しているのだから当然、大きく支持されるのだろうとの見かたもある一方、報道では、過激化するデモ隊に対して、市民の支持が減少し始めているとの見解もみられた。選挙そのものも、保安上の不安を名目に延期されるのではないかとの意見も出ていた。貴重な機会となる選挙を守るべく、抗議派の活動は一時の自粛を呼びかける声もあったのだという。





2019年11月の香港における
区議会議員選挙。
そこには、区議会という
意味以上の価値が
香港市民にはあった。

写真: South China Morning Post

選挙当日、有権者は当局による選挙妨害を想定して、朝早くから投票所に並ぶ等の行動を取っていたとのことだ。そこまでして、守るべき選挙。それが示すのは、現地香港では情報が錯綜しており、正しいとされる情報を誰もが見失っていたということだ。デモ主催者の発表する参加者数と、警察の発表する参加者数には大きな隔たりがある。選挙は、当然不正への対処を最大限施されており、その数値は政府側も認めざるを得ないものになる。

結果は民主派の圧勝だった。民主派の若者達の笑顔を伝えるサウス・チャイナ・モーニング・ポストの写真。それを日本で見た時には心が動かされた。香港行政長官であるキャリー・ラム氏も、市民の声として尊重する旨の発言をせざるを得なかった。

山場とされた区議会議員選挙を超えた香港デモ。成功とはいながらも、デモ隊の要求する五大要求は、逃亡犯条例の撤回だけが叶えられたにすぎない。一つの妥協もできないと主張してきたデモ隊にとって、現時点で引き下がる訳にはいかない。中国政府はどう出るのだろうか。長期化に誘導して、市民の疲弊を狙うのか、それとも1月の台湾の総統選に向けて強権的に収束させるのか。

台湾の総統選への香港デモの影響。中国との統一をするべきか否か。台湾にとって香港は自分たちの未来を映すひとつの鏡である。台湾に住む友人がフェイスブックにシェアしていた香港のデモのニュース。台湾人にとって香港で起きていることは決して他人事ではないのだ。

一国二制度という社会実験を経た緩やかな併合が、香港と中国の両者に成功と繁栄をもたらすのか。それは未来の台湾にもなり得るのだ。台湾民主党の現総統、蔡英文は2016年の総統就任以来、支持率低下に悩まされることとなった。経済的な存在感を増す中国に対して、反中派の路線を貫くことは困難だった。蔡政権の舵取りに対して、中国は経済制裁を強め、台湾の民衆は蔡政権に対して懐疑的な姿勢を強めていった。

そんな中での、香港デモである。当の香港市民が上げている叫びを聞く限り、中国に組み入れられる道の先にあるのは絶望であるように見える。香港デモへの支持が台湾内部で強くなるにつれ、蔡政権の支持は復活しつつあった。「ひとつの中国」を目指す中国政府はこれを危機として捉えるに違いない。

その後、私の香港滞在の後に行われた台湾総裁選では、蔡政権の大勝に終わることになる。習近平はこれをどのような思いで噛み締めたのだろう。

約一年前の2019年1月2日、習近平は歴代の指導者と同じく、台湾に対する姿勢を講話の中で触れていた。そこでは久しく台湾に向けられていなかった「一国二制度」という言葉が向けられた。雨傘運動で沸き起こった香港の民衆の反発はすでに抑え込んだ。その「一国二制度」という制度を成功事例として、台湾統一を目指していたのだ。それは、習近平が繰り返し述べてきた「中国の夢」の実現の重要な要素になるはずであった。

「中国の夢」は中国人民解放軍国防大学教授の劉明福氏により2010年に発行された書籍が元となり、事あるごとに習近平のスピーチの中で触れられてきた。2012年より、中国共産党の国家理念とされており、2049年、中華人民共和国の建国百周年を目指し、1840年のアヘン戦争以前の状態、「世界の霸者」の復活を目指すというものだ。アヘン戦争の敗北から、1949年の中華人民共和国の設立までの約百年間を「屈辱の百年」と位置づけ、そこから建国百周年までが「栄光の百年」という訳だ。

壮大な中国共産党の計画が、香港を起点に崩れつつある。それは習近平にとっては決して受け入れることのできないシナリオだ。2019年5月15日の朝日新聞による劉明福氏へのインタビューでは、台湾統一に向けては、平和的解決を試みるものとの軍事行動も辞さないとの考えが表明されている。

降りしきる雨の中の集会。冷たい雨の悲壮感が、むしろ抗議者達を奮い立たせている様だ。集会は続くが、広東語が分からぬ自分にとっては大きな動きがある様には思えない。雨を避けて建物に入る。疲れた抗議者達が同じように休んでいる。まだ若い人も多い。おそらくは高校生程の年齢だろう。スマホのゲームに夢中になっている。その姿を見ると、彼らにとっての抗議の意味をあらためて考えさせられる。彼らは常に民主化というイデオロギーに対して向き合っているわけではない。抗議デモは生活の一部であり、友人と集う場所である。時々は周囲に合わせて抗議のフレーズの声を上げたりもするが、集会の間でさえも、友人と他愛のない話や、ゲームで時間をつぶしたりする。

抗議者の間に、多数の記者を見かける。日本人の記者もいる。今回、自分は一般人でありながら、あたかも記者のように現地に趣き、人々の話を聞きたいと思った。それは記者だけに許された特権なのだろうか。記者と書かれた黄色いベストは、自らが公正な立場であることを無言で主張する。一方で自分は、普段着のままだ。黒色に近い服装をしているので、周囲は抗議者だと思っているのだろう。時々、広東語で声をかけられるが、返事をできないでいると、日本人だと気付かれて驚かれる。



香港市民の多くは日本人に対して好意的だ。自己主張が強い香港市民にとっては、日本人は頼りなく見えるのだとも思うけれど、礼儀正しく、規律を守る日本人というイメージは好意をもって受け入れてもらえる。長らく香港が身近な旅行先であったことも影響するのかもしれない。行儀よくお金を落としていってくれる日本人。ただし、国民一人あたりのGDPにおいては香港は日本よりもずっと高い値を維持してきたことを留意する必要はある。ビジネス上の合理性こそが精神的な支配力を持つと言われる香港。一方で、世界第2位のGDPを誇り、これだけ強い存在感を持つ現在の中国における国民一人あたりのGDPは、世界各国間の順位において未だ80位台。さらに遡れば香港の人々にとって、その国、中国はかつてどう見えていたか。そして、中国に返還され、一国二制度という欺瞞のもと、日々中国本土に浸食される中で燐る不穏な感情。

雨のなかで続く集会の展開を待つ間、私は日本から持ってきた文庫本を読んでいた。『転がる香港に苔はつかない』、著者は星野博美氏。香港中文大学に留学していた著者が香港返還前にその地を再訪した際の記録だ。その10年ほど前に学生時代を過ごした著者は、香港に対してノスタルジックな親密感を持った視点でその生活を語る。取り壊される前の九龍城砦での出来事をはじめ、庶民寄りの香港市民の生活に敬意をもって触れている貴重な語り口だ。香港の狭い土地に集まる人々。漠然とした夢はあっても、それを具現化する見通しはつかないまま、日々の繰り返しに忙殺される生活。

それらの人々と、この抗議集会に集まる人々は同じなのか。最大規模と言われた

6月の抗議デモは200万人を超えたと言われている。香港の人口は700万人弱。デモ参加者の数が正確な数字だとしたら、とてつもない数だ。民主主義の自覚を持つこと。それはある程度の教育を受けたからこそなのかもしれない。抗議活動には顔を出さず、生活に埋没する人々もまだ多数いるのだろう。本当に行動を起こした人々は既に香港を離れているのかもしれない。そんな夢をあきらめつつ、民主主義の自覚からは逃れられない、ここに集まっているのはそんな狭間の人々なのだろうか。それともただ自然に、生まれ故郷である香港への愛なのだろうか。

集会に集まる人々は、老若男女様々だ。過激な活動とは程遠いように思われる趣のご婦人も含まれる。

不意に響く歌声。抗議集会に集まった人々が歌っている。レ・ミゼラブルの劇中歌である『民衆の歌 (Do you hear the people sing?)』、その歌は香港の抗議活動の象徴にもなっている。それは、フランスにおける1936年の六月暴動を舞台とした、民衆による革命の物語だ。

革命という言葉には希望がある、そう誰もが考える。虐げられてきた民衆が、自らの権利と尊厳を取り戻す行為なのだと。ただ、それは必ずしも幸福をもたらさない。不安定化した統治システムの中での治安の悪化。それがもたらす結論。約10年前、2010年のチュニジアが起点となった民主主義革命、ジャスミン革命は中東を中心に広がり「アラブの春」と呼ばれたが、結果的には、殆どの国でテロや無政府状態を引き起した。その中でシリアを中心に生まれたのがテロ組織「イスラム国」であったことを忘れてはいけない。



『転がる香港に苔はつかない』星野博美著
返還直前の香港への再訪。香港中文大学での思い出。
周りに反対されながらも深水歩に住む。
そこに息づく人々の生活に惹かれた著者。
失われる香港を知る上で手掛かりでもある。

『香港、深圳、そして武漢 — 抗議デモから繋がるもの、その行方』第1集

第1.0版

2020年6月20日